

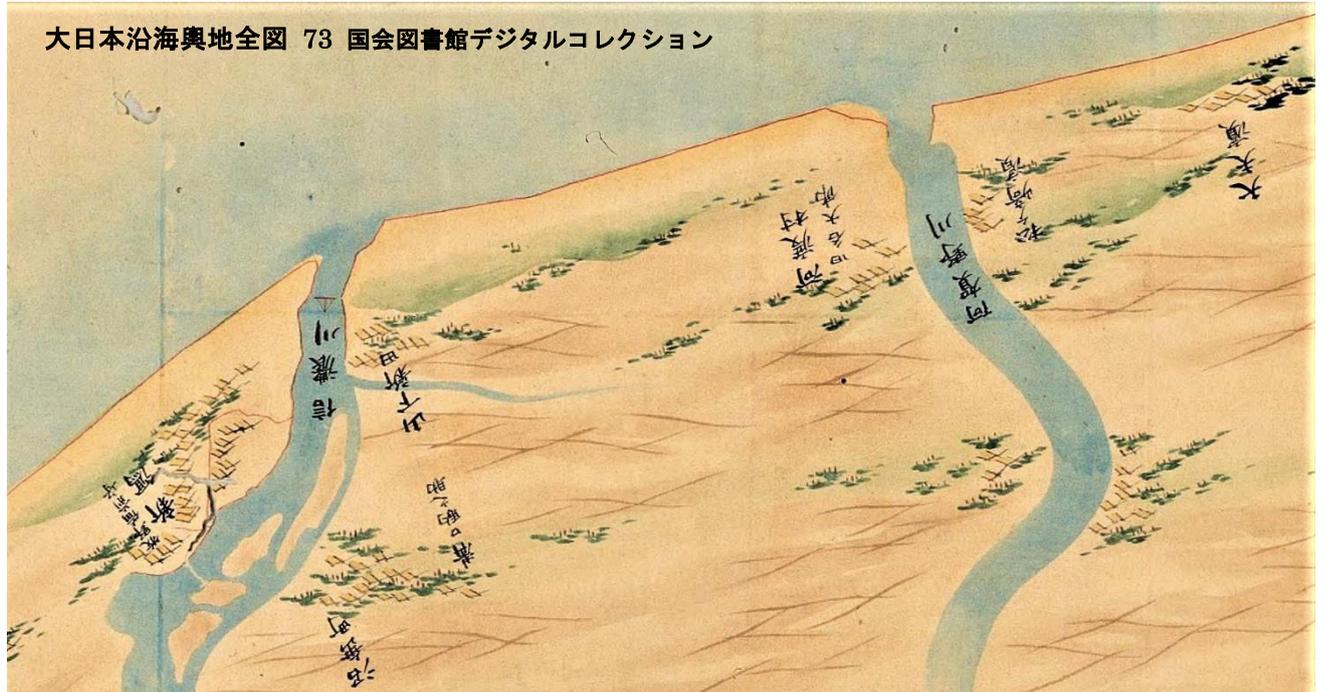
展示品一覧

○ 大図（新潟県新潟市～聖籠町）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第十九〈自間瀬／至網代〉」

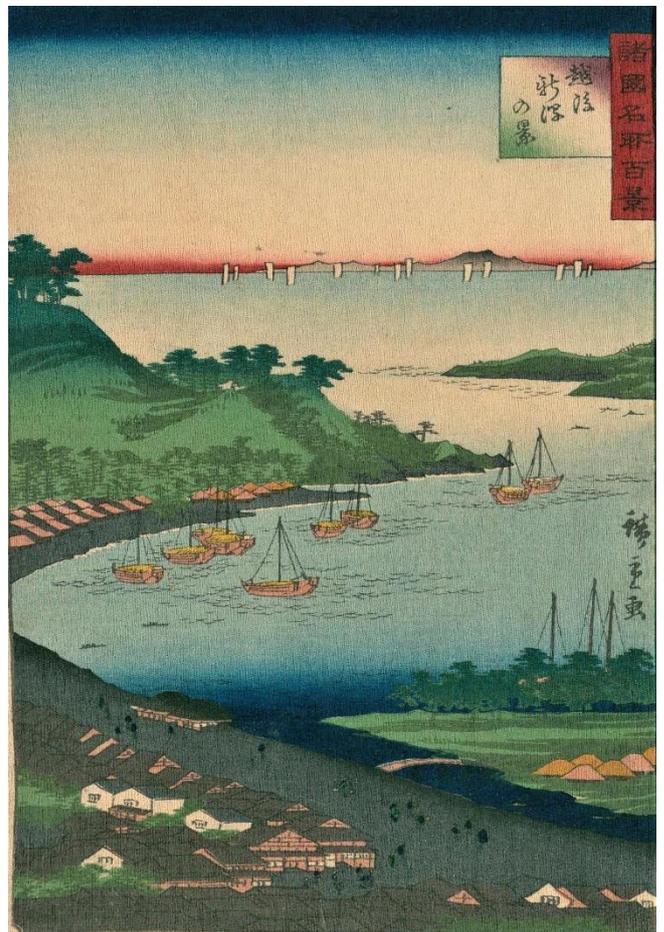
国宝：地図・絵図類 番号35、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

大図の外に「自 間瀬 北二尺七寸一分五厘 至 網代 東三尺六寸八分一厘」と墨書され、測線の末端同士の大図上の位置関係が記録されている。この大図は享和2年9月23日に村松浜（新潟県胎内市）を出立して日本海沿いに進み、海岸を離れ新潟町で2泊し、同月27日に間瀬村（新潟市）に到着するまでの測量の成果である。



9月24日の測量日記には新潟町について「町長二十七丁、巾六丁、通五筋…家三千軒程」とし、西回り航路の要衝としての繁栄がうかがえる。

9月26日の測量日記には「新潟より角田までは海浜白砂平道」とあるように単調な海岸線ではあるが、海岸砂丘列が続くなだらかな海岸地形の絵画的表現は見事である。淡青色の海原に対して、信濃川と阿賀野川はこの写本に比べ濃青色であり印象的である。



二代広重 『諸国名所百景』から越後新潟の景

○ 大図（新潟県魚沼市～湯沢町）

「自高崎三国街道図 第二（自浅貝／至堀之内）」

国宝：地図・絵図類 番号82、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

「自浅貝 北四尺四寸八分二厘
至堀内 東一尺二寸五分四厘」

と墨書され、測線の末端同士の大図上の位置関係が記録されている。

この大図は第4次測量の享和3年9月24日から28日迄の測量の成果として、浦佐、六日町、越後湯沢など新潟県の魚沼盆地が描かれている。

直前の9月22日には「暦局より急御用状」を受取り、糸魚川事件について叱責されたばかりである。

測量隊は「三俣、二居の間大難所」をへて三国峠に向かった。大図中の荒戸峠は測線が屈曲して難所感がある。



○ 大図（群馬県高崎市～三国峠～新潟県湯沢町）

「自高崎三国街道図 第一（自高崎／至浅貝）」

国宝：地図・絵図類 番号81、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

大図の端に「自**安中** 北六寸八分四厘 至**上田** 西五尺三寸一分三厘」と墨書されている。但し、これは別の大図「越後街道図 第四（自安中／至上田）」（国宝 地図・絵図類 57）のデータを誤記している。伊能チームでもこのようなミスがあるのである。

この大図は第4次測量の享和3年9月29日に二居村を出立して浅貝から三国峠を越え、10月4日の高崎の手前までの測量の成果である。

10月3日の測量日記に「佐渡奉行其外御用、此所を往来す」とあるように、三国街道は江戸と越後、佐渡を結ぶ要路であった。三国峠のあたりは測線が細かく屈曲し、その険しさが窺える。国宝の伊能図には三国峠に神社の合印を見ることができる。これは写本には見られないものである。

三国峠を境に新潟県と群馬県では村々の領主の表記が一変する。魚沼郡では幕府領が卓越しておりほとんどの村が「御料○○村」「□□村」であるが、群馬県に入ると一村が複数の領主に分割される「相給」となり、6人の領主名を記した村も現れる。

『会報』第63号に星埜由尚氏の「三国峠を越えた伊能忠敬」があり参照されたい。



○ 小区域下図（金沢八景 神奈川県横浜市）

「自武蔵国久良岐郡富岡村至相模国三浦郡浦郷村下図」

国宝：地図・絵図類 番号 171、縮尺 36,000 分の 1、法量 45.8×32.3cm



↑ 広重 「武陽金沢八勝夜景」大英博物館



地理院地図

金沢八景として有名な景勝地の小区域下図である。第2次測量中の享和元年4月6日に富岡村に到着し、雨のため2日間「逗留、地図仕立」となった。9日には能見堂まで測量し、擲筆山地蔵院から「所々測量」した。広重の「武陽金沢八勝夜景」はこの能見堂からの夜景という。地理院地図の「能見堂跡」からの風景とは想像を絶する景観の変貌である。

この下図は山、岬、島に向かっておびただしい数の朱線と墨線の交会線が引かれており、測線をたどることを難しくしている。

○ 「伊能家屋敷地実測図」

国宝：地図・絵図類 番号533

法量 38.8×47.2cm

忠敬の嫡孫の忠誨が文政7年2月に伊能三郎右衛門家の屋敷を実測して作製した地図であり、その測量野帳である「居屋敷実測野帳」（文書・記録類216）とともに、『伊能忠敬研究』51号の「伊能忠敬旧宅発掘調査報告書」に掲載されている。

実測図の数カ所から目標物に朱線が引かれている。また、母屋のあたりに朱書きの文字が三行ある。

「南北八寸??????

東西一尺一寸八分??

長一尺一寸??????」

と読んでみたが、極めて細字であり自信は無い。実測図の建物で史跡伊能忠敬旧宅に現存するのは門、店舗、土蔵だけである。逆に現在の書斎と用水路は実測図には描かれていない。

測量の経緯は『伊能忠敬日記』の文政7年2月1日～8日に記載されているので、その部分の全文の積文を紹介する。

「朔日 晴天 七左衛門来ル。庭測量。

二日 晴天 七左衛門来ル。庭測量。

三日 晴天 ウラ畑測量。一昨夜、帯刀江戸より帰りシ由、御屋敷よりノ御達書持参。尤も半右衛門同道。

四日 晴天 今朝、箔屋丁家主金右衛門来ル、先達て久兵衛ヲ以て印形いたし候書付不宣故、又改メ候書付帳四冊持参。予印形いたす。尤もハイレウイタシ候和解之書付也。家主、今夜乗船帰ル。

尤も朔日夜、江戸出火石川丁ヤケ候故、半兵衛同道出府。御屋敷御達書有之二付、永沢半右衛門、帯刀、平右衛門、治郎右衛門等来ル。

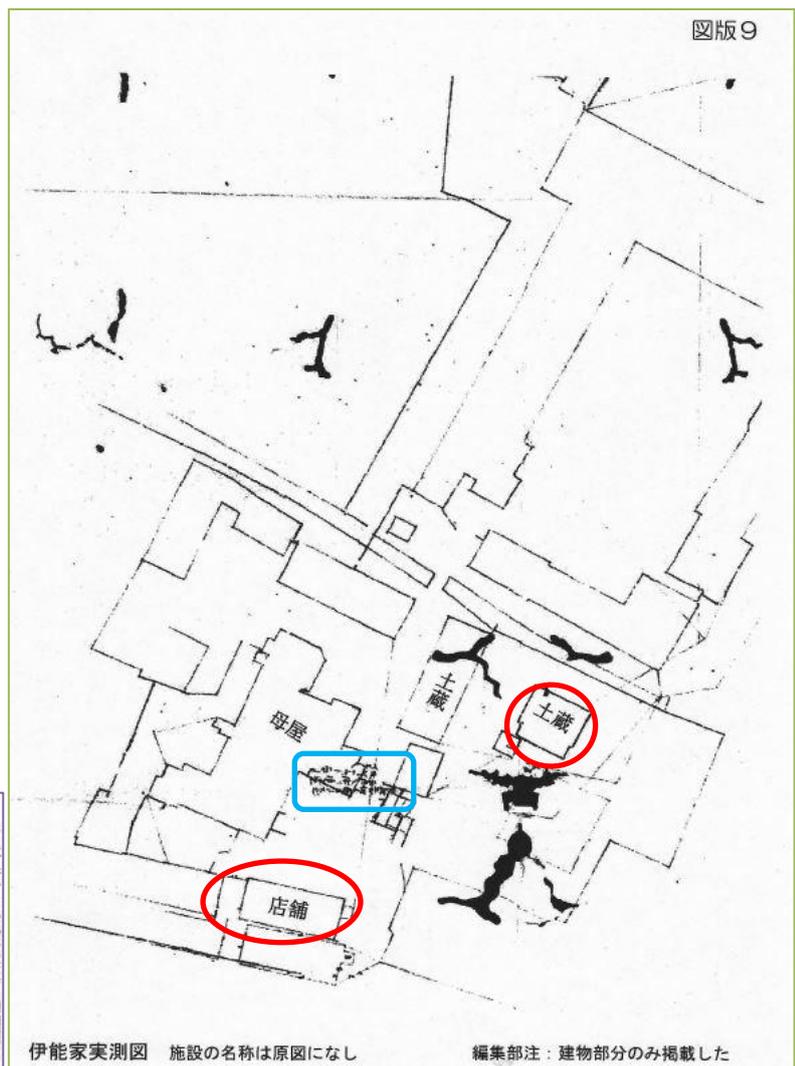
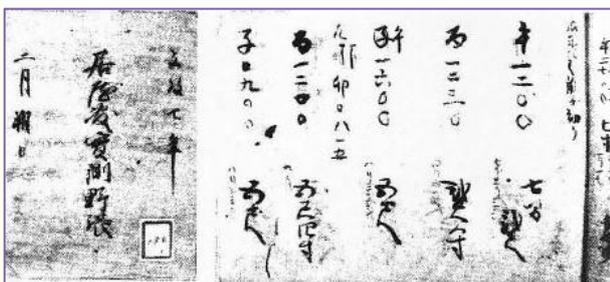
五日 曇天 九時頃雨降。

六日 晴天 居屋敷庭、地図成ル。

七日 晴天 今夜、加納屋治兵衛母来ル、泊ル。

八日 晴天 治兵衛母帰ル。予、七左衛門エ行き、居屋敷測量。」

測量を手伝い、またその屋敷を測量してもらった伊能七左衛門は、帰村して「在所御用」を務めることになった忠誨のもとで「伊能七左衛門が算稽古を初める」（文政5年12月6日）、日食観測では手伝人として象限儀を担当（文政6年6月1日）するなど、天文暦学に興味があったようである。



「居屋敷実測野帳」と「伊能家屋敷地実測図」 「伊能忠敬旧宅発掘調査報告書」『伊能忠敬研究』51号

○ 書籍のリスト

「書籍書上」 国宝：文書・記録類 番号561、562

展示部分には14種の書名が記されているが、その内容はまちまちで分類されていないように思われる。「儀象考成」「ランデ訳」などのような天文学書、「筑後志」「但馬考」「豊後風土記」「天草備考」「信濃地名考」「有馬六景」のような地誌、イエズス会士の漢訳世界地誌「職方外記」、新井白石がシドッチを尋問して著した世界地理書「采覧異言」、蘭方医宇田川玄随の「槐園叢書」、麻田剛立の長兄の綾部妥胤の「家庭指南」、近藤重蔵の金銀貨幣の図録「金銀図録」などの書名がランダムに記されている。「ランデ訳八冊」は冊数が一致するので国宝の「ランデ暦書管見」のことであろう。

○ 『槐園叢書』 国宝：典籍類 番号107

「書籍書上」に記載された書籍から、宇田川玄随の『槐園叢書』の写本を展示している。

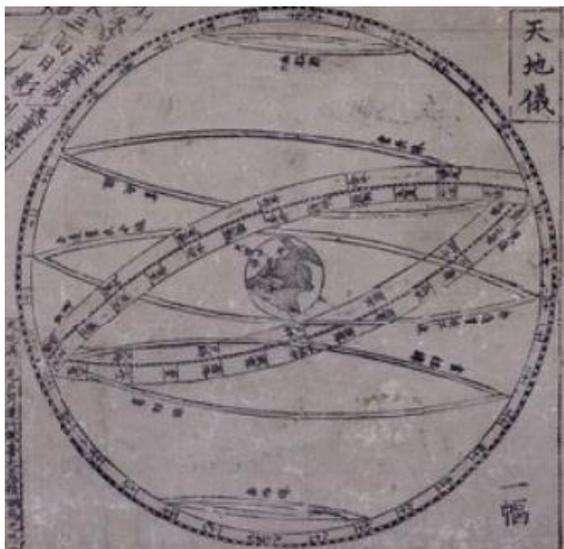
宇田川玄随（号は槐園 1755-1797）は美作国津山藩の江戸詰の藩医で、漢方から蘭学に転じ日本最初の西洋内科書『西説内科撰要』を刊行したことで知られる。また宇田川家の洋学は養子の玄真、榕菴へと受け継がれ、医学から自然科学へと広がっていった。

宇田川槐園旧蔵の『槐園叢書』は早稲田大学図書館の洋学文庫に所蔵されており、古典籍総合データベースで閲覧出来る。『槐園叢書』の記載内容は、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』（京都大学貴重資料デジタルアーカイブで閲覧出来る）に記載された図版や記事の書き抜きである。

マテオ・リッチは明末に中国布教を開拓したイタリア人宣教師である。彼は利瑪竇（りまとう）の漢名を持ち徐光啓や李之藻ら科挙官僚を信者とし、彼らの協力のもと『天主実義』のような教義書以外にも、ユークリッド幾何学を漢訳した『幾何原本』などヨーロッパ文化を漢字文化圏に伝えた。

『坤輿万国全図』はマテオ・リッチの世界地図をもとに李之藻が漢訳し、万暦三十年（1602）到北京で木版刷りの大形地図として刊行されたものである。鎖国時代の日本にも舶載され多くの模本も作製され、地球が球体であることや五大陸など江戸中期以降の世界認識に大きな影響を与えた。中華思想を付度して太平洋を中心に置いたことは現在の我々の世界地図のイメージとして定着している。

「万暦壬寅孟秋吉旦」に「欧邏巴人利瑪竇」が謹撰した『坤輿万国全図』には世界地図以外にも多くの図版や記事が記載されており、宇田川玄随はそれを書き写し、忠敬はさらにその写本を所持していた。新井白石もまた『坤輿万国全図』の図説を摘録しており（『山海輿地図説』宮内庁書陵部蔵、画像公開システム）、白石の世界地理書『采覧異言』にも反映されている。記念館には世界地理に関しては『職方外紀』『新訂万国全図』『地球輿地全図 亜細亜北亜墨利加境』が伝存している。白石の『采覧異言』は展示中の『書籍書上』に記載されているが、国宝の典籍類の目録にはない。



『坤輿万国全図』（京都大学附属図書館所蔵）天地儀と日食・月食に関する部分